

# 自然体験活動時の 安全管理マニュアル



## はじめに・・・

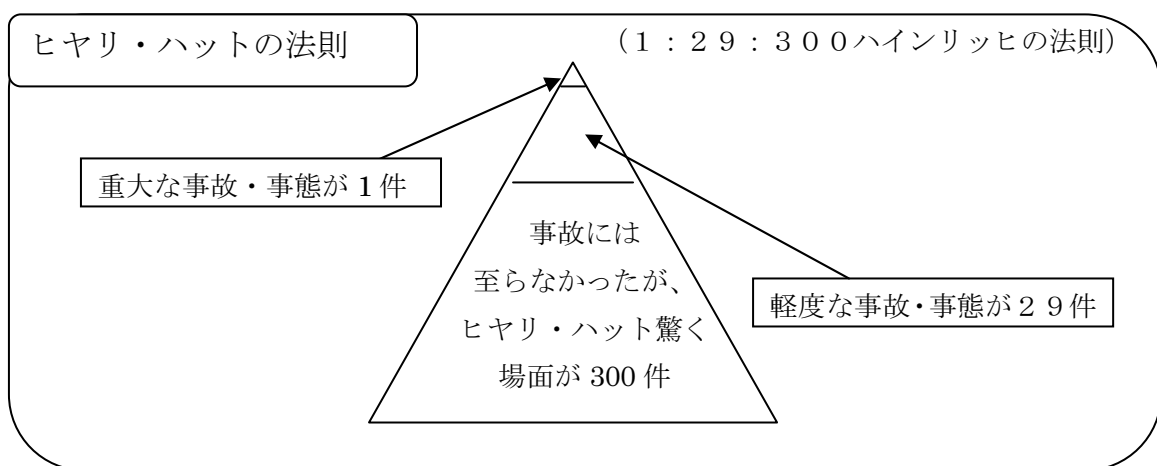
たいない自然学校は『人が将来にわたってこの美しい自然環境に囲まれて暮らし、今と変わらず自然の恵みを受けることができる持続可能な社会の実現をめざす』という理念のもと、自然体験活動を提供しています。すべての体験活動はこの理念の達成のために行う活動であり、また自然は、教室では学ぶことのできない様々な気づきや学びを与えてくれます。そもそも人間は生き物であり、自然の一員です。現代の日本において多くの人がこのことを忘れがちですが、自然体験はそんなことも思い出させてくれます。

とはいえ野外における活動は、人間の生活圏にはない危険があります。自然は、熊やハチなどの野生動物の住処であり、平らな道はありません。また水辺や天候の急変による重大事故も報告されています。このようなことをなくすためにも安全対策は必要不可欠です。

自然体験活動は有益です。しかし、それにおいて一番大切なことは、事故やケガなく活動を実施し終え、無事に家に帰るといことです。重大事故を起こしてしまえば、それがどんなに素晴らしい活動だったとしても、被害者にとっては『悪い活動』になります。

より多くの人に、自信を持って自然体験を提供するためには、プログラムの安全を確保する必要があります。『事故を未然に防ぐ』『万が一、事故が発生した場合の的確な対応』などの安全管理を徹底しましょう。

また、事故は往々にして『まさか』と思うようなことが起こります。つまり、見落とししているか、知らなかったことにより発生しています。危険を知り理解することが予防につながります。



## 目次

### I. 体験活動時の安全管理

- 1、事故を未然に防ぐ安全対策の流れ
- 2、環境別体験活動の安全管理
  - (1) 川・海における危険と対策
  - (2) 山・森における危険と対策
  - (3) 農業林業体験における危険と対策

### II. 自然学校施設内における安全管理

- 1、施設内で想定される事故
- 2、自然災害の対策
- 3、火災対策
- 4、食品衛生に関する事故対策
- 5、参加者への危険箇所の伝達

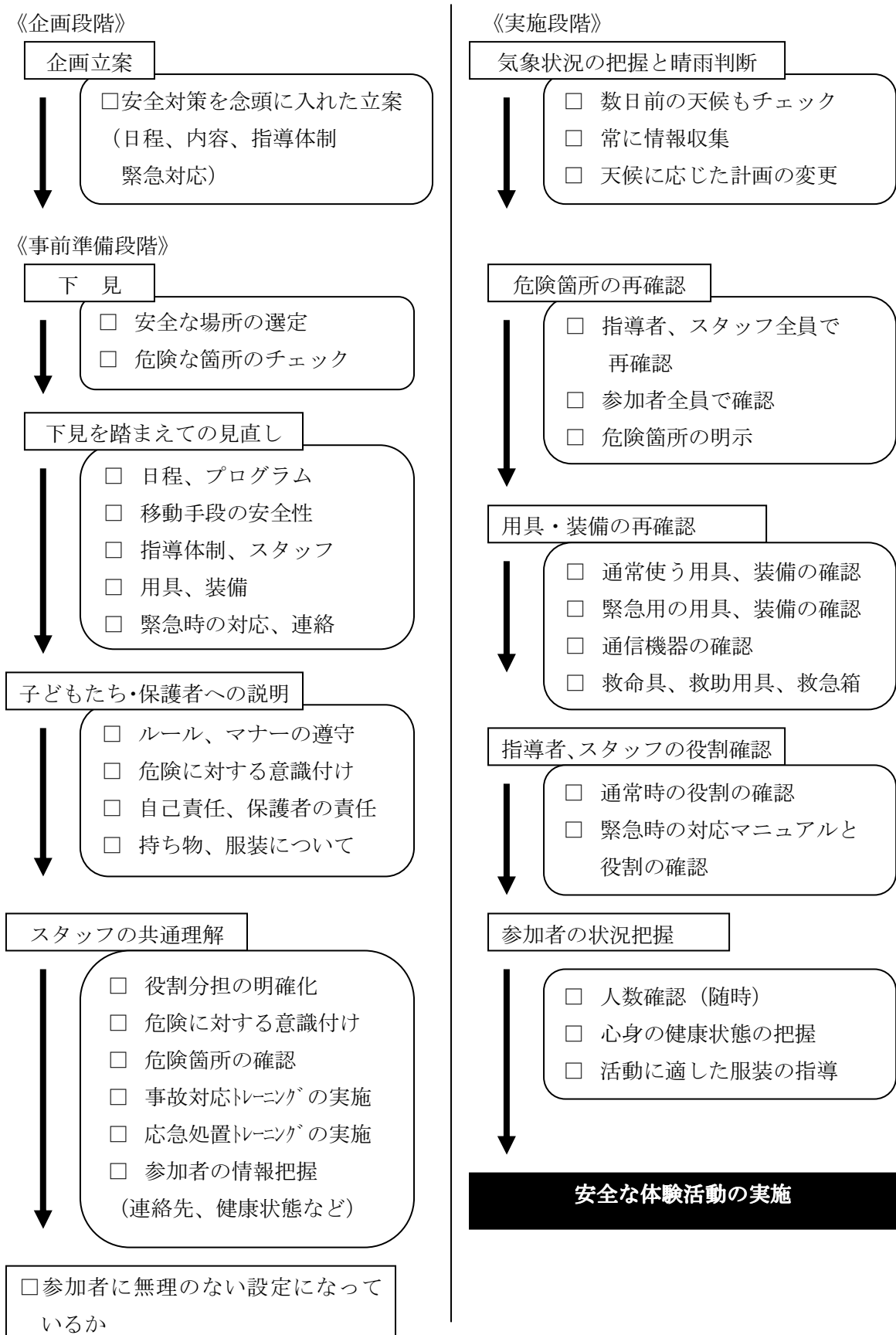
### III. 事故発生時の対応

- 1、緊急連絡体制

# I. 体験活動時の安全管理

重大事故は起きてからでは取り返しがつきません。危険を知り、傾向を予測し、予防と対策を立てておくことが重要です。

## 1、事故を未然に防ぐ安全対策の流れ



## 2、環境別体験活動の安全管理

自然体験活動は、それぞれのフィールドや種目別に様々な危険が潜んでいます。下見により危険を認識し、対策・対応を確認しましょう。消防署の救急救命法の講習を受けたり、公共施設の利用においてはAEDの位置確認も大切です。また、参加者には注意点をしっかりと伝達しましょう。

<p>● 野外活動における共通の注意事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 炎天下での活動では、脱水症状を起こすことが考えられます。帽子を着用させ、こまめに水分補給をさせましょう。</li> <li>・ 湧き水、生水は飲まないよう注意しましょう。</li> <li>・ 野外に自生しているものを食べないよう注意しましょう。</li> <li>・ 常に雨天プログラムを用意しましょう。そして『天気予報で警報が出ているときは雨天プログラムに変更』などの、ルールを決めておきましょう。</li> </ul>
--

### (1) 川・海における危険と対策

注意事項	危険項目	安全対策
川の流れ	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 川の水の力、速さは見た目以上である</li> <li>② 深みはないか</li> <li>③ 水の流れは複雑である</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 水深、水温、水流などの状況について必ず確認し、活動に支障がないか判断する。場合によっては、ロープを張るなどの対策を講じる。</li> <li>● 複数のスタッフによる監視体制をとり、目を離さない。</li> <li>● 必要な装備を配備する。 (浮き輪、ボート、ホイッスルなど)</li> </ul>
水温	● 子どもは体が冷えやすい。運動能力が低下する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 水温を確認する。</li> <li>● 適当な時間に休憩の時間を取り、陸上に上げる。</li> </ul>
川の石	● 川底の石には、コケがつき滑りやすくなっているものがある。	● 事前に注意を促す。手も使って4本足で歩く方法をやってみせる。
増水	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 雨量により、短時間で増水や土砂崩れの危険がある。</li> <li>② 上流部での雨量は、現場でわからない可能性もある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 天気予報、現場の警報などの情報に気をつける。</li> <li>● 常に水位を意識する。</li> <li>● 危険が予想される場合は、活動を中止。安全な場所へ避難する。</li> </ul>
落雷	● 雷鳴が聞こえたら落雷の可能性がある。	● 丈夫な建物の中へ避難する。
危険生物	● クラゲなど	● 毒性を把握し、応急処置をできるようにしておく。

(2) 山・森における危険と対策

注意事項	危険項目	安全対策
登山道及び遊歩道	落石・転倒・滑落によるケガ。道の崩落・決壊	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 危険な箇所は避けて通る。別なルートをとる。</li> <li>● 通らざるを得ない場合は、ロープを用意するなどして、できる限りの対策を講じる。</li> </ul>
天候	山の天候は変わりやすい。落雷、大雨、降雪など。	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 事前に天気予報を確認する。</li> <li>● 天候がくずれそうな場合は中止する。</li> <li>● 雨具や防寒具の用意の徹底。</li> </ul>
雪山	雪崩	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 下見を行い、危険箇所をチェックする。</li> <li>● 危険箇所には近づかない。</li> <li>● 雪の状況や気温に注意する。</li> </ul>
危険生物	クマ・ハチ・ヘビなど	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 鈴などを鳴らし。遭遇を避ける対策をする。</li> <li>● 遭遇してしまった際の安全な対処の仕方を学んでおく。</li> <li>● 下見時に蜂の巣がないか見ておく。</li> <li>● 負傷した際、必要となるもの（ポイズンリムーバーや薬、水）を用意しておく。</li> </ul>

□ 事前準備

- A. 行程ルートの下見（危険箇所や迂回路の確認）
- B. 休憩を含めた所要時間の確認。無理のない行動計画。
- C. 出発前のセルフエイドレクチャー
- D. 各スタッフの連絡先電話番号の共有。
- E. 緊急時体制の確認。
- G. 必要な装備の確認

□ 当日の注意事項

- A. セルフエイドの徹底。注意事項をよく聞く必要を強調する。
- B. 参加者の人数と体調の確認
- B. 山道を歩く際は、案内人が先頭を歩く。他スタッフは中ほどにばらけて入り、最後尾にも配置する。近くの参加者の様子をうかがったり、離脱者を防ぐ。

(3) 農業林業体験における危険と対策

注意事項	危険項目	安全対策
農林業用器具	鋭利な刃物によるケガ。 カマ・オノ・ノコギリなど。	● 危険物であることを認識させる。 ● 安全な使い方を指導する。
農業機械	コンバインやチェーンソーなどの動力のついた機械。	● 作業前に危険事項を伝え、安全な使用方法を指導する。 ● 機械や作業中の死角を伝え、不用意に近づかないことを伝える。
危険生物	クマ・ハチ・ヘビなど	● 鈴などを鳴らし、遭遇を避ける対策をする。 ● 遭遇してしまった際の安全な対処の仕方を学んでおく。 ● 草の陰などに毒蛇が潜んでいる可能性があることを伝える。 ● 負傷した際、必要となるもの（ポイズンリムーバーや薬、水）を用意しておく。

## Ⅱ. 自然学校敷地内における安全管理

### 1、施設内で想定される事故

施設内での危険	生じるケガの種類	安全対策
階段やはしご、木から落ちる。 滑って転ぶ。	外傷、骨折、頭部強打	滑り止めをつける
クライミングウォールから 落ちる	骨折、捻挫	勝手に使用できないように する
ナタなどの刃物で手を切る。	外傷、	手袋をつけさせる
火に触れる。熱湯がかかる。	火傷	注意を促す。
火災、地震などによる災害。	大火傷、外傷、頭部強打、 死亡事故	
食中毒	嘔吐、下痢、発熱	衛生に気をつける
犬、鶏、ウサギなどの家畜	外傷、アレルギー	家畜のしつけをする。 事前に確認する。

※このほかにも施設や設備により様々な危険があります。それぞれにおいて発生の可能性のある事故を予測し、対策を講じることが必要となります。また、定期的にメンテナンスを行うことは事故を未然に防ぐことにもつながります。日ごろから意識しておきましょう。

### 2、自然災害の対策

いつ起きるかわからない地震、強風雨等の自然災害の防災対策について、日ごろから訓練しておきましょう。

#### ・室内設備の落下・転倒防止

家具などの転倒防止金具を取り付けましょう。重量があるものは、その置き場所を考えて、危険の少ないところに設置しましょう。

#### ・外装の点検

強風により飛ばされたり倒れたりするものはないか、定期的に点検しましょう。



### 3、火災対策

#### ①火災事故を未然に防ぐ基本的なポイント

##### A. 消防訓練

消火設備の操作について、日ごろから訓練しましょう。

##### B. 非常口の確保

通路がふさがれていることがないように、日ごろから整理整頓に努めましょう。

##### C. 消火器の設置場所の確認

玄関や階段など、人目につきやすいところに設置しましょう。

##### D. 火元を断つ

ストーブやガスコンロなど、火事にならないよう注意して使用しましょう。

#### ②火災発生時の対応

##### A. 3つの役割分担

『初期消火』『避難誘導』『通報』の3つの役割分担が必要です。様々なケースを想定し、いざというときに備えましょう。大まかな役割分担を決めておくことも重要です。

##### B. 臨機応変な対応

自分がパニックにならないことが大切です。自分と参加者やスタッフの安全が確保された後、落ち着いてできる消火活動を行いましょう。

### 4、食品衛生に関する事故対策

参加者に安全・安心な滞在を提供する観点から、食中毒の防止と食物性アレルギー疾患への対応をしなければなりません。調理を担当するものは、食品衛生関係の講習会などで専門知識を習得することが望まれます。

#### ①食中毒

##### ・食中毒の症状

突然の吐き気、嘔吐、腹痛、下痢、発熱などの症状を呈し、年齢に関わらず発症します。小児や体が弱っている人は要注意

##### ・食中毒の主な種類

(1) 細菌性食中毒：ノロウイルスやサルモネラ菌（全体の9割）

1) 暖かく水分があると猛スピードで増加する

2) 冷凍しても死なない

3) 加熱に弱い

(2) 科学性食中毒：洗剤などの物質が混入

(3) 自然毒性食中毒：毒キノコなど

・食中毒の防止策

- (1) 食中毒防止については、日頃から意識して厨房回りの清潔を保ち、細菌の発生を抑える工夫をする。
- (2) スタッフは、全員が食品衛生に関する基本的な知識を持ち、調理の際は、手洗いをし、アルコールなどで消毒をする。
- (3) 参加者にも手洗いを徹底させ、ともに調理する際はアルコールで消毒する。

・ウイルスや細菌への対処法

- (1) 微生物をつけない
  - ・食材は流水でよく洗い、すぐに使用しない場合はラップなどで覆い、原因となる微生物をつけないように工夫する。
  - ・タオルの共用はできるだけ避ける
- (2) 微生物を増やさない
  - ・微生物が増殖する時間を与えないよう、食材を冷却する。(基本的には 10℃以下で保冷)
  - ・調理後はできるだけ早く食べる。また、短時間でも冷却保存する。
- (3) 微生物を殺す
  - ・微生物を殺すためには、菌では食材の中心温度が 75℃以上、ウイルスではその温度が 85℃以上に加熱する。

## ②食物アレルギー（アナフィラキシー）

アレルギーの有病率は国民の3割を超え、中でも子どもによる「食物アレルギー」は多くなっており、成人にも見られる。症状は蕁麻疹、ショック、下痢、腹痛等と多様で、ひどい場合には救急へ通報しなければならない。

厚生労働省では、アレルギーの原因となる原材料 7 品目を「特定原材料」として、すべての流通段階での表示の義務化をするとともに、18 品目を「特定原材料に順ずる物」として、その表示を推奨している。

### 流通段階の表示対象になる食物アレルギーの特定原材料（25 品目）

特定原材料	卵、乳、小麦、そば、ピーナッツ、エビ、カニ
	魚介類：アワビ、イカ、イクラ、サケ、サバ
	肉 類：牛肉、鶏肉、豚肉
	果実類：オレンジ、キウイフルーツ、クルミ、モモ、リンゴ、バナナ
	その他：大豆、マツタケ、ヤマイモ、ゼラチン

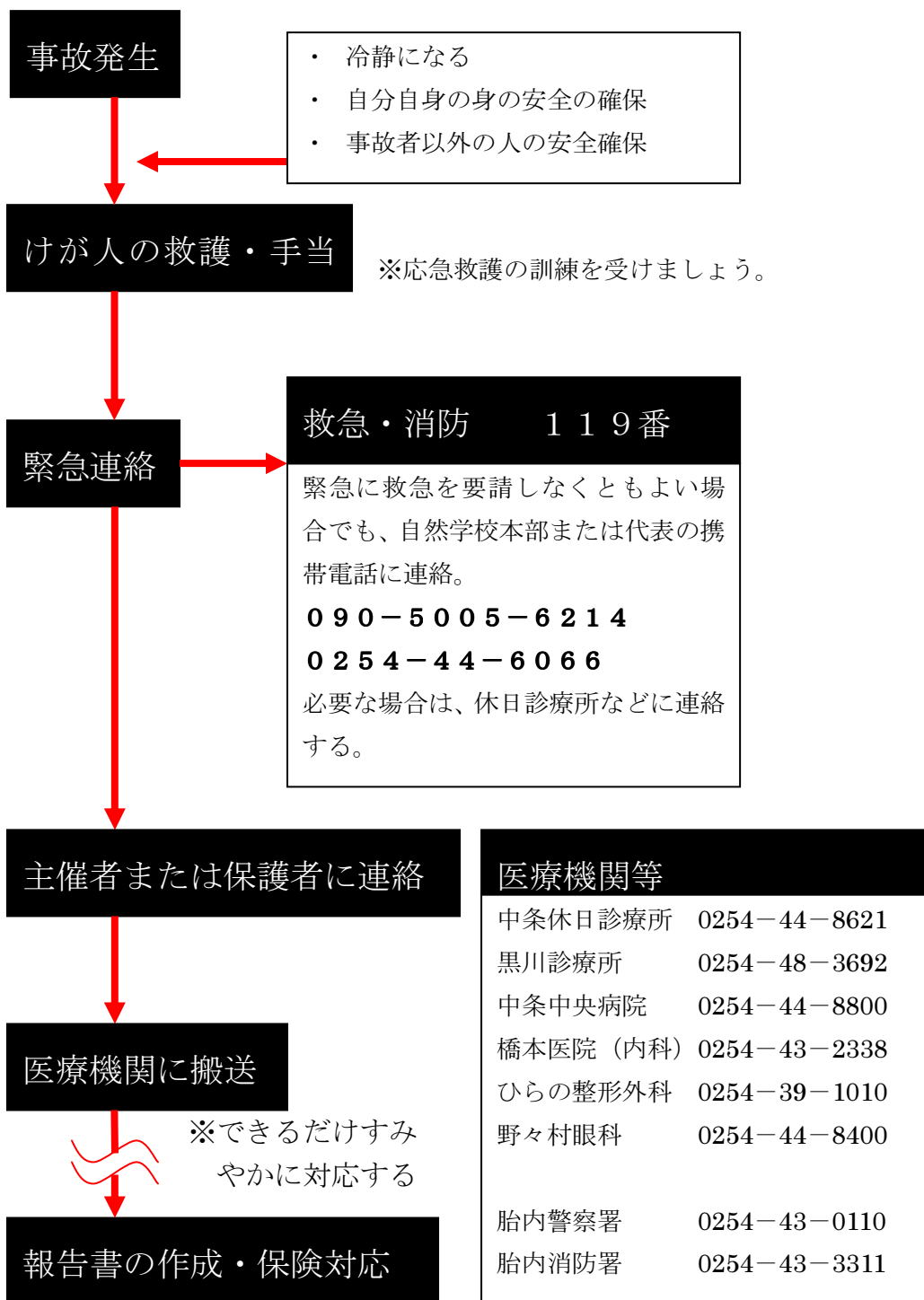
## 5、参加者への危険箇所の伝達

自然学校の施設内でプログラムを始める際、参加者のほとんどは初めてか久しぶりに訪れた人たちである。よって、施設や動物の扱いなどで注意すべきところがあれば、最初の挨拶の際にすべて伝えておくようにする。

### Ⅲ. 事故発生の対応（クライシスマネジメント）

どんなに安全対策をとっていても、時として事故によるケガ人や病人が発生することがあり、避けることができません。そのような緊急の場合は下の緊急連絡体制により対応します。

#### 1、緊急連絡体制



一人で案内している場合、二人以上で案内している場合を想定し、だれがどの部分を担当するかを考えておきましょう。